

## A21a 突発現象フォローアップのこの1年

加藤 太一 (京大・理)、VSNET 管理者グループ

本講演においては、昨年秋の「突発天体セッション」以降に起きた突発天体現象のうち、国際変光星ネットワーク (VSNET) が、通報・確認やフォローアップ観測に特に大きな役割を果たした現象についてレビューする。

この期間に発見された新星は4個あった。いずれの天体においても、新天体の通報、確認、精測位置測定等において VSNET グループは大きな役割を果たした。この結果、これまでの手法では見過ごされていたかも知れない特異な性状や知見が数多く見出された。特に金津天体とも呼ばれる V445 Pup は観測史上初の水素欠乏型の新星と考えられ、恒星進化上の位置が注目される。V1548 Aql は最初変光星として報告されたものであるが、我々が新星の可能性に気づき、大きな星間吸収を受けた新星と確認された天体である。新天体の迅速な確認や性状の解明において、大規模サーベイカタログとの照合が手近に、かつ星図を用いて行える環境の重要性が従来にも増して強く認識された。VSNET チームでは、2MASS, MSX, ROSAT 等の主要なサーベイや既存カタログとの迅速な照合を可能にするシステムを構築し、実際に多くの新天体の性状確認に役立っている。

この間に起きたガンマ線バーストでは、国内初の可視光残光検出に成功した GRB 010222 (2001 年春季年会 PDL1) が特筆される。HETE 衛星からのトリガー受信システムも稼動し、新たな可視光残光の検出が待たれるところである。

この期間、アマチュアの変光星サーベイが多くの成果を産み出し始めた。特に長谷田氏発見の2つの変光星が、特異ウォルフ・ライエ星と同定される、Liller 発見のマゼラン雲領域の「フラッシュ」が近傍星の大規模なフレア現象と確認される、さらに高見澤氏の発見した変光星が原始惑星状星雲段階の珍しい天体と同定されるなど、伝統的なサーベイと近代的なカタログ情報照合システムとの有機的統合が、恒星活動現象観測の最前線に結び付く大きな成果を挙げていることは特筆に値する。